

三国時代における灯火器の種類と使用法

李 相日（忠南大学校博物館）

翻訳：松永 悦枝（奈良文化財研究所）

I. 序論

照明道具研究が持つ意味は、古代社会の多様な姿を知ることができるということにある。照明道具を通じて、入手困難な燃料を消費する経済的行為、一部の階層を中心におこなわれた文化的行為、死者のための副葬または燃灯供養を示す宗教的行為を証明することができる。

とくに、古代韓国において使用された照明道具のうち、三国時代の灯火器について注目したい。近年、灯火器は多くの発掘成果から、百済と新羅の古都である扶余と慶州で相当量の資料が蓄積され、住居址だけでなく、古墳や寺院遺跡からの出土も確認されている。そこで本稿では、このような三国時代における灯火器の種類と使用法について、簡略に検討をおこないたい。

II. 多燈式灯火器

「燈盞形土器」とも呼ばれる多燈式灯火器は、新羅と加耶の古墳を中心に、主に5世紀初頭から副葬される。また、近年では光州河南洞遺跡や霊岩泰潤里チャラボン古墳など、湖南地域からの出土例が確認されている。多燈式灯火器の最大の形態的特徴は、複数の灯盞を持つという点であり、これは中国の漢、または楽浪にみられる多枝燈の影響を受けたものである（図1）。

多燈式灯火器は規格化されていない威信財または副葬品として、形態的な規範は比較的緩やかで、出土事例もまた、一般的・規則的な副葬はみられない。ただし、いくつかの点で時期的変化と特徴がみられる。まず、灯盞の構成として、咸安道項里39号墳、東萊福泉洞39号墳出土品の場合、大型の灯盞または筒状の管が中央に位置し、その周りに小型の灯盞4～6個が配置される。両古墳は比較的古い時期に編年されるが、漢と楽浪の多枝燈では、中央の太い枝を中心に小さな枝が配されていることから、これらの影響が残っている可能性を示唆する資料である。東萊福泉洞1号墳・53号墳出土品の場合、中央の灯盞はなくなり4つの灯盞を持つ形となるが、その後、慶州金鈴塚と慶州徳泉里1号墳段階では灯盞の数が5～6個に増え、土器外面に心葉型の垂下飾が付されるようになる。そして透孔の数と大きさが増し、もっとも多くの杯（灯盞）が確認された咸安末伊山25号墳の事例もある（図1-7）。

次に、円筒管【訳者註：灯盞内面底部に設けたくぼみ】の構造から時期的変化をみることができる。円筒管は多燈式灯火器の特徴的な構造で、灯盞下部の管を介して燃料の供給を一定にし、照度や灯芯と燃料の消耗時間を均一に維持する。古相の咸安末伊山45号墳、咸安道項里39号墳段階にはみられないが、後の東萊福泉洞古墳群、慶州金鈴塚や慶州徳泉里出土品には、円筒管が設けられている。以後、咸安末伊山25号墳のように、比較的小型のものがみられ、多燈式灯火器が消滅する6世紀中葉段階では、燃料を貯蔵する目的ではなく、長い灯芯を固定するために細長形に変化した慶州花谷里の事例が確認される（図2-7）。

このような多燈式灯火器の性格は副葬品であると考えられる。出土様相をみると、古墳内部の副葬品空間中、大甕や大壺の内部、またはその上部から確認されている。照明の象徴に鑑みると、副葬品のなかで相対的に高く、重要な場所に置かれていた可能性が高い。古墳外部からの出土事例も確認されている。慶州月山里68号石槨墓下部を巡る周溝では、墳墓祭祀で用いられたとみられる大壺内部



図1 多燈式灯火器

(1. 国立昌原文化財研究所 1999、2. 釜山大学校博物館 1996、3. 東亜大学校博物館 2003、4. 釜山博物館 1992、5. 『古蹟調査報告』第一冊、6. 中央文化財研究院 2005、7. ウリ文化財研究院 2018)

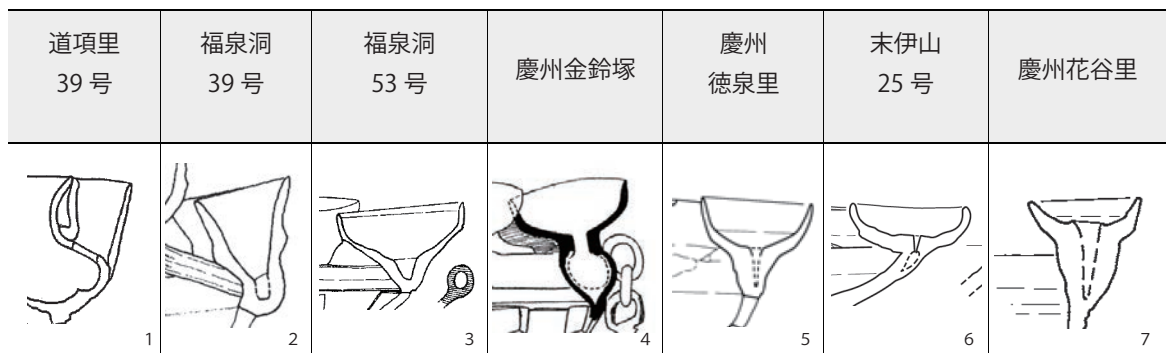


図2 多燈式灯火器の円筒管

(1. 国立昌原文化財研究所 1999、2. 李賢珠他 1989、3. 釜山博物館 1992、4. 『古蹟調査報告』第一冊、5. 中央文化財研究院 2005、6. ウリ文化財研究院 2018、7. 聖林文化財研究院 2012)



図3 多燈式灯火器の煤
(東亜大学校石堂博物館所蔵品、筆者撮影)

から多燈式灯火器が出土し、靈岩泰澗里チャラボン古墳においても、古墳周溝から器台、円筒形土器などとともに出土している。このほか、光洲河南洞遺跡9号溝からも出土が確認され、遺物が1～2個体ずつセットをなして、一定の間隔で出土することから、大規模な祭儀行為が推測されている。

以上のように、多燈式灯火器の大部分は副葬品であり、明確な使用痕は確認されない。しかし、一部の事例で使用痕が確認されることから、注目される。東亜大学校石堂博物館所蔵品(図3)は、出土地は不明であるが、5つの灯蓋を有し、垂下飾の痕跡と交差透孔が配される脚部形態から、慶州金鈴塚や慶州徳泉里1号墳段階に比定される。この資料の場合、灯蓋口縁部に使用による煤が吸着して

いる。つまり、中国の多枝燈と同様、多燈式燈蓋が今後生活遺跡から出土する可能性を念頭に置くべきであろう (図4)。

III. 移動形灯火器

過去には、街灯などの人工照明がなかったため、夜間に移動する際は照明道具が必要であった。既存の研究からは、大部分の室外用照明道具は高麗時代に発展した後、朝鮮時代に普及し広範囲で使用されたことが知られているが、三国時代にも移動を目的とした専用の灯火器の製作が確認される (図5)。

一般的な灯火器に比べて大型で、移動時に使用する際は、燃料の補充がむずかしいため、多くの量を入れることができるように考案されたと考えられる。また、把手とともに灯蓋外面に杯状の突起を付け加えたものもあるが、その用途に関してはいまだ不明である。ただ、移動時に使用する場合、燃料の流出や火の粉の飛散による火災の危険性があるため、油受けの役割をしたり、灯芯が燃料部分に落下するのを防ぐためのものだと考えられる。

把手がつく形態は、中国の照明道具においてもみられる特徴である。室外で使用される行灯の場合、持って歩くことができるように柄やつる状の持ち手のような追加的な構造が設計されている (麻蹇萍 2014: 65)。

移動形灯火器の大部分は百濟遺跡で確認され、王宮の扶余官北里遺跡、双北里遺跡や益山王宮里遺跡、国家施設である扶余扶蘇山城と青山城、国家寺院である益山弥勒寺などから出土することから、特殊な目的のための使用や、あるいは高い階層の遺物だと考えられる。

IV. 灯明皿

大衆的で伝統的な灯火器といえば、皿形燈蓋、すなわち灯明皿の形態を一般的に思い浮かべるだろう。このような形態は百濟熊津期から出現し、泗泚期に普及する。とくに三国時代の場合、他の遺跡に比べて寺院遺跡からの出土量が確実に多い。代表的な例として、扶余陵山里廃寺では、寺域の外郭地域に位置する第3建物址から88点の灯明皿が一括資料として出土し、回廊付近からは火種の貯蔵孔を持つ小型建物も確認された。慶州芬皇寺では、出土した517点の土器中、261点が灯明皿であり、慶州皇龍寺でも講堂北西部から多くの灯明皿が廃棄された状態で出土した。このような事例から、当時の僧侶たちは最高知識人として、文章を書き仏経を読んでいたと推測することができる (国立扶余文化財研究所・国立扶余博物館 2017: 60)。新羅において、100 軀の仏像、100 点の高座、100 点の燈、香、花を準備する百高座法会が実施された記録 (金福順 2010: 97-111) を考慮すれば、燃灯供養の意味で使用されたものであろう。

灯明皿はさまざまな使用法があったと考えられる。中国の研究を参考に『三国史記』、『三国遺事』を分析した結果、灯明皿の燃料としては主に、鹿、牛などの動物性燃料と、エゴマ、ゴマなどの植物性燃料を使用し、灯芯としては、公州武寧王陵出土灯明皿内部に織物をねじった形態が確認されている (李相日 2020)。このような燃料と灯芯は、灯明皿に残存する煤から、それぞれ異なった使用法を推定することができる (図5)。

まず、灯明皿は皿内面に構造物がないものが多く、煤の付着が口縁部に集中する。このような煤の付着は、植物性燃料を用いるための灯芯を口縁部に沿わせて使用したことに起因する。とくに百濟の一部と新羅の多くの灯明皿では口縁部を外側に拡張させることで、灯芯を載せやすいように考案した例がみられる。

この使用法では特徴的な様子も確認される。一部の灯明皿では、土器片で灯芯を押さえて固定した痕跡がみられる。土器片が位置していた周辺に煤が集中する。次に灯明皿を二枚使用する方法である。灯芯が燃焼し、発生する灰と油かすが床に落ちるのを防ぐために、下に灯明皿をもう一枚重ねて置いたり、灯芯の固定のため、内側に灯明皿を重ねて使用するものである(図5-①)。これにより、灯明皿数枚が重なって出土する状況を説明することができよう。

次に、灯明皿内面に柱状突起(灯柱)を設ける例である。柱状突起のうち、円筒形に成形した粘土塊を付ける形態として、柱状突起を接合後、その周囲をユビナデした痕跡がみられる。別作りしたものを皿内面に貼り付けるため、大部分は取れて剥落痕が観察されるものもある。柱状突起上面中央部分をくぼませ、灯芯をより固定しやすいようにした形態があることをみると、植物性燃料用の灯芯を柱状突起の上に載せて使用したと考えられる(図5-②)。

柱状突起内部に筒状の灯芯管を持ち、灯明皿底部と柱状突起内部がつながるものも少数ながら確認される。これらは、灯芯を柱状突起内部の管に挿して植物性燃料を使用するもの(図5-③)で、扶余官北里遺跡、慶州皇龍寺、慶州仁容寺などで数点が確認されている。

一部の柱状突起は、杯内面底部から指でつまみ上げて作り出しているため、上面が扁平でなく丸みを帯びるといった特徴がある(図5-④)。これは上面が楕円形を呈するために、灯芯を固定するにはやや安定性に欠ける。動物性燃料を置き、柱状突起下部に油かすが落ちるようにする用途であると推定される。

上部が針状に突出する場合(灯針)、灯芯を安定的に置きづらい形状となる。このような形態から、動物性燃料の使用を目的としたものだと考えられる。動物性燃料は常温で固体であることから、灯針に固定して使用したと考えられる(図5-⑤)。動物性燃料は燃えると脂から汚れが含まれる粘性の強い膏へ変化するが、このような痕跡が灯針部分で確認される。

最後に灯明皿内面中央に環状突起を設ける例である。慶州皇南大塚出土の燈蓋形土器にみられる構造で、新羅地域を中心に確認される。環状突起は中国南朝代に盛行したとされるが、内面がくぼんだ円柱の構造物上に灯芯を載せ、燃焼時に発生する灰などを内側に隔離することで、燃料の汚染を防ぐ用途が推定されている(蔡大偉 2012: 31)。これらの中国事例から、植物性燃料と灯芯の組み合わせを推定することができるが、突起内部に動物性燃料を入れて使用した可能性も考慮すべきであろう。

ただし、需給状況の不安定性により、この2種類の燃料がとくに区別なく使用されていたという指摘(国立扶余文化財研究所 2008: 135、姜素英 2017: 31)を考えると、このような灯明皿の使い方は、厳守されていたというよりは、実生活のさまざまな状況に応じて柔軟に用いられたとみられる。

V. 灯火器の代用品

三国時代における灯火器は、扶余や慶州など、古都地域の代表的な遺跡以外からの出土例は稀で、概ね6世紀末前後から出土が急増する。このような様相から、6世紀以前と、灯火器が出土しない遺跡では照明を用いていなかったという断定はできない。

このような状況に対する解釈は、灯火器の代用品の存在から説明することができると考える。遺跡出土の生活容器を詳細に観察すると、内面に煤と油かすが吸着した痕跡が観察される器種がある。事実、照明においてもっとも重要な要素は、灯りをとすための道具ではなく火をおこすための燃料で、燃料を入れる器であれば、器種にこだわらず、灯火器の代用品として使用されたであろう。

生活容器をそのまま使用する場合も確認されており、生活容器内部に構造物を付け加えることで灯火器として使用した事例もみられる。器種は、椀、高杯、蓋杯が代表的で、灯火器が多数確認される

益山 王宮里 出土	扶余 官北里 出土	江西省 吉安県 出土	移動形灯火器模式図
			

図4 移動形灯火器
(国立扶余文化財研究所 2006、国立民俗博物館 1996、彭通凡 1994)


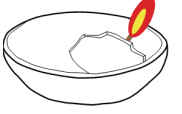





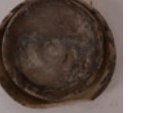





















①口縁部 (植物性燃料)			
			
			
②柱状突起 (植物性燃料)			
			
③柱状突起 (植物性燃料)			
			
④柱状突起 (動物性燃料)			
			
⑤灯針 (動物性燃料)			
			
⑥環状突起 (植物性・動物性燃料)			
			
			

図5 灯明皿の使用方法
(国立扶余文化財研究所 2008、2009、2010、2011、2012、2013、2015、2016、国立文化財研究所 2013、2016)

6世紀末の百濟地域の場合、泗泚期に入っても灯火器の代用品が依然確認されることから、生活のなかで照明を使う際にさまざまな方法を模索していたと推測される。また、灯明皿の場合、その大部分が口径 10 cm 前後の小型品であるが、皇龍寺では口径 15 cm 以上の椀が日常容器の食器としてだけでなく、製作当初の機能から脱却し、灯明皿としても代用されていたことは、金堂、講堂などの広い空間を明るくするため(国立慶州文化財研究所 2013:244-245)という特殊な用途の推定もおこなわれた。

VI. 結論

照明専用の機能を持つ灯火器の考案および生産には、新たな概念の導入と思想が存在したことはあきらかであろう。とくに、大部分の灯火器が寺院遺跡から出土することから、仏教の伝来と導入によって燃灯供養の概念が導入され、専門的な灯火器生産が開始されたと考えられる。やがて、このような灯火器は、徐々に王室と貴族階級の実生活のなかでも普及していく。また、灯火器の使用には入手が困難な燃料を消費するという経済的行為であり、特定の階層のみがおこなった文化的行為であったといえるだろう。

このように、灯火器に関する研究は当時社会の複合的な姿を反映していると考えられる。ただし本稿のような研究は、韓国と中国、日本ともにいまだ大きく注目されていない。今後は重要遺物だけでなく、灯火器のように、過去の文化を復元するにあたり、大きな役割をなす生活遺物に対しても関心を寄せ、研究を進める必要がある。

【参考文献】

- 姜素英 2017 『考古遺物に由来した生体分子の化学的分析』中央大学校博士学位論文
 国立慶州文化財研究所 2013 『遺物からみた新羅皇龍寺 — 皇龍寺出土遺物資料集—』
 国立慶州文化財研究所 2016 『皇龍寺址 1976～1983』
 国立扶余文化財研究所 2006 『王宮里 発掘中間報告Ⅴ』
 国立扶余文化財研究所 2008 『陵寺 — 扶余陵山里寺址 10 次発掘調査報告書—』
 国立扶余文化財研究所 2009 『扶余 官北里百濟遺跡 発掘調査報告書Ⅲ』
 国立扶余文化財研究所 2010 『扶余軍守里寺址 I — 木塔址・金堂址 発掘調査報告書—』
 国立扶余文化財研究所 2012 『王興寺址 IV』
 国立扶余文化財研究所 2015 『王興寺址 VI』
 国立扶余文化財研究所 2016 『王興寺址 VII』
 国立扶余文化財研究所・国立扶余博物館 2017 『百濟 王興寺』国立扶余文化財研究所
 国立民俗博物館 1996 『火の民俗』
 国立昌原文化財研究所 1999 『咸安 道項里古墳群Ⅱ』
 金福順 2010 「新羅の百座高法会」『新羅文化』36 東国大学校新羅文化研究所
 東亜大学校博物館 2003 『発掘遺跡と遺物 — 東亜大博物館』
 釜山大学校博物館 1996 『釜山大学校開校 50 周年記念 先史と古代の文化』
 釜山博物館 1992 『東萊 福泉洞 53 号墳』
 ウリ文化財研究院 2018 『咸安 末伊山古墳群 第 25・26 号墳』
 李賢珠・李尙律・全玉年 1989 「東萊福泉洞古墳群 第 2 次 調査概報」『嶺南考古学』6 嶺南考古学会
 李相日 2018a 「百濟燈盞使用法研究」『百濟研究』68、忠南大学校百濟研究所

- 李相日 2018b 「百済における燈盞と伝統燈器)の比較研究」『民俗学研究』43、国立民俗博物館
- 李相日 2018c 『百済 燈盞 研究』忠南大学校碩士學位論文
- 李相日 2019 「三国時代 燈器 研究」『韓国上古史学報』104、韓国上古史学会
- 李相日 2020 「三国時代燈盞の燃料と灯芯」『次世代 人文社会研究』16、東西大学校日本研究センター
- 聖林文化財研究院 2012 『慶州花谷里生産遺跡 - 慶州花谷地区地表水補強開発事業地区内-』
- 中央文化財研究院 2005 『慶州 徳泉里古墳群』
- 麻賽萍 2014 「漢代燈具実用功能考」『東南文化』2014- 6、南京博物院
- 彭通凡 1994 『中国古陶瓷』芸術図書公司
- 蔡大偉 2012 「長江中下遊地区三至十世紀瓷油燈初歩研究」吉林大学碩士學位論文